

教養教育による大学の蘇生

副学長(教学担当) 上野ひろ美

教養教育論が賑やかである。旧制高校型ないし大正教養主義的な教養教育から、コミュニケーション能力や批判的思考力の形成といった現代的課題に対応した教養教育論に至るまで、さまざまである。中央教育審議会が、目標の実現に向けて主体的に行動する力を「新しい時代の教養」として、その教育の必要を強調したことは記憶に新しい(二〇〇二・二)。

1 古典的教養教育観からの脱却

戦前の古典的教養主義には、欧米の新知識をいち早く輸入することに日本が躍起だった時代背景があり、まずは語学力が必要とされた。

そのなかで、西欧から直輸入された人文科学の知識を中心に、その手法を日本文化に当てはめる試みが始まり、それが西田哲学であり、『三太郎の日記』である。

しかしながら、もはやエリート養成でない今日の大学教育が、旧制高校型の教養主義をモデルにしても、有効性はない。求められるのは、大学進学率四十%と大衆化した高等教育、情報化したグローバル社会にふさわしい教養教育である。単なる知識や博識は教養とは見なし難い。事象に接して、バランスの取れた判断をくだす助けとなる時、博識は初めて教養の名に値する。

2 「教養主義からの逆襲」

平成三年の大学設置基準大綱化により、教養教育に関する授業区分や教員組織に関わる基準が撤廃された。これが、教養軽視と映った。

当時、雑誌『新潮45』が特集した「教養主義からの逆襲」(一九八九)が面白い。教養とは、

- ・ 視野を深く広くする
- ・ 歴史意識を有する
- ・ 知ることではなく行為すること
- ・ 先を感じし、思索に組み入れる
- ・ 社会的行為に際して、社会的責任、他者に対する思いやり、社会への貢献をその背景に持つ
- ・ 自由と節度の適切な調和に達するような精神の流れのこと

等と続く。そのなかに、教養教育と専門教育の関係についての言及がある。

教養と専門は相対立する。専門は最終的には実用性に尽き、教養は他者の納得を必要とする。「総論賛成、各論反対」の事態はその一つの表われである。つまり、教養主義の方が全体を見渡すことができるのである。たとえば、専門主義でやってきた医学分野の脳死問題、末期医療は、教養主義が積み残された典型である。ここに、教養教育の意義が浮かび上る。

3 教養教育と専門教育

本年七月、「教養教育」に関する自己評価報告



教養教育科目の授業の一風景

書を大学評価・学位授与機構に提出した。過去五年間に奈良教育大学が教養教育をどのように捉え実践してきたかを、自己評価したものである。本学の特色は、教養教育を専門教育と深く関連させ、専門教育もまた教養的・基礎的内容を併せもつと捉えたことである。

戦後の大学教育論を振り返れば、教養教育は、専門教育のための予備的知識を提供することではない

- ・ 一つの学問分野の概論、入門でもない
- ・ 知識を学び取る方法や態度を教える場である
- ・ 両者の違いは、内容にあるのではなく、取り扱い方、教え方、方法にある

といった捉え方が蓄積されてきている。なかでも平成三年大学審議会答申の意義が、「教養教育を、リベラル・エデュケーションと捉え、その実現を学部段階の専門教育の主要な課題とした点にある」とする指摘が目目される(館昭氏、山本真一氏)。

4 「専門性に立つ新しい教養人」

従来、教養教育には、学生が学ぶ努力をすれば、必ずと必要な能力は形成されるといって、予定調和的な効果が期待されていた。そうではなくて、教養教育は、形成すべき能力を培うためのものでなくてはならない。

大学に対する二十一世紀志向の教育要求は、教育界で当事者が論じるより何歩も早く、とりわけ経済界から具体的に提示される傾向がある。今や教養教育は大学の蘇生に関わっている。教養教育の意義を再確認し、「専門性に立つ新しい教養人」(寺崎昌男氏)の育成に力を注ぐことであろう。